



やっと本格的な冬を感じられる日々が増えてきました。寒風にさらされて恋しくなるのが、春の精のような桜の花です。そんな桜を見る会がいま、批判の嵐にもまれています。

こうした会とはおおよそ縁のない私ですが、この事件に注目するのは、次のような問題点があるからです。

まず、自腹で行うべきことに税金を使い、その催しについての資料を破棄して使途の妥当性を納税者が判断できないようにさせたこと。

と。そして、その責任を、反論しにくい立場の障がい者雇用の短時間職員にかぶせたこと。

桜の上手な散らせ方

周囲の知人たちは、「なんでこんなことばかり続くんだろう」とほやいています。でも、原因は意外と簡単かもしれません。

これまで繰り返されてきた事件は、みな同じパターンです。証拠になる文書を捨て、抵抗できない目下のだれかを悪者にして意思決

定者は説明を避け、目を引くイベントを次々繰り出してみんなが忘れるのを待ち、選挙で勝つ。

人間は弱いものです。そうしたことが続けば、またやっても大丈夫と、つい繰り返してしまいがちです。叱るべき時にきちんと叱らないと善悪がわからない

子どもになるという子育ての常識を、この間、ほとんど発動できなかった私たち「親」の責任がそこにあるのではないのでしょうか。

まずいことが起きたら証拠を捨てればよいなら、政治に「失敗」はありません。こんな楽な手口を放棄する

人はいないでしょう。

となれば、次にどんな政権が来ようと同じことを繰り返してもふしぎではありません。そうならば、

「日本の政治とはそういうもの」が、未来永劫(えいごう)、常識として定着してしまいます。

桜は散り方にこそ美があります。税金の使い方をうやむやにするようなことをしたらいいことはない、と学習できるような散らせ方を、私たちがさせることができるかどうか。これが、「再発防止」の成否の分かれ目になるはず。

ジャーナリスト

和光大学名誉教授

竹信 三恵子